

氏名(本籍地)	木原克司(兵庫県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博乙第67号
学位授与年月日	平成23年3月16日
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当
論文題目	難波宮・京と宮都の歴史地理学研究

論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	田畑 久夫
	(副査)	昭和女子大学教授	山本 暉久
		昭和女子大学教授	増田 勝彦
		立命館大学名誉教授	日下 雅義

論文審査結果の要旨

本論文は「難波宮・京と宮都の歴史地理学研究」と題し、難波京時代の自然・歴史の2つの景観を主として地形環境と関連させて考察した後、難波宮と京を含めた日本の宮都変遷史、さらには我が国における条里制あるいは条坊制都城の成立と系譜や、東アジア世界における坊里制あるいは条坊制都城出現の需要を実証的に検討した非常に詳細な研究である。本論文の構成は、序章、本論に該当する第1章から第7章、および終章となっている。

序章では、申請者の歴史地理学的研究の立場、すなわち歴史の各時代の地形環境を復原し、作成したベースマップの上で、歴史時代の空間組織の形成や動態の考察を目指す、という立場を、先行業績の整理とともに論じ、また、等高線を含めたよりミクロな微地形復原図の作成が本研究において不可欠であることを主張している。

第1章では、申請者のいう埋没微地形復原の試みを、上町台地北端部など3事例で具体的に紹介した後、本論文の対象地域である大坂平野全域に復原を拡大していく場合には、地盤沈下量等の考察など、いくつかの課題も克服しなければならないことがある点を指摘している。

第2章では、最初に第1章で指摘した諸課題を踏まえて、上町台地を含めた大坂平野全域の遺跡発掘調査報告書等から得られるデータおよびボーリング柱状図などを資料とし、さらに地盤沈下量を加えた汀線を含めた1mの等高線図を作成した。その等高線図をベースとして、空中写真の判断から得られた推定河道を復原して7・8世紀の地形図を完成させた。この地形図の特色は、遺跡の生活面高度および当時の地盤沈下量を考慮して埋没微地形の復原を行ったことである。

第3章では、埋没微地形復原図、発掘調査の成果、文献史料などを用いて、前・後両期

の難波宮の構造、前期難波宮の宮城、難波京の規模、構造等について考察した。その中でも、難波京城の比定は木原説と称され、学会においても有力な説の1つとなっている。

第4章では、律令制下の摂津国と河内国に所属する住吉・長原地域を中心に、古墳時代や飛鳥時代など各時代別の埋没微地形図をベースマップとして難波京の造営年代とも深く関連している各時代の条里等の地割形態の特徴を空間的に検討している。

第5章では、各宮都におけるこれまでの発掘調査の成果を踏まえて、7・8世紀の日本の宮都・宮室の規模と構造について考察を進めるとともに、内裏、朝堂や官衛によって構成される宮中枢部の構造や条里制あるいは条坊制都城を含めた宮都・宮室の類型化を行い、その発展過程について論を展開している。

第6章では、第3章（第3章から第5章）での考察で明らかとなった前期難波京に始まり、平安京に至る我が国条里制あるいは条坊制都城について、考古学的な調査成果を整理しつつ、各都城の研究の到達点を明確にし、各都城の構造に認められる系譜について述べている。

第7章では、中国の殷・周代から隋。唐代の都城、朝鮮三国時代の都城や7世紀から9世紀に至る日本の宮都をとりあげ、各々の都城・宮都の形態や構造を国家の規模や政治・社会構造から考察し、東アジア三国に共通する坊里制あるいは条坊制都城成立の要因を明らかにした。具体的には、坊里制あるいは条坊制都城の源流が中国にあることは既に明白となっているが、中国・朝鮮・日本の三国とも国家形成の初期においては、坊里制あるいは条坊制都城が登場せず、国家形成過程のある段階になってから初めて出現することが明らかとなった。

終章では、本論に該当する第2章から第7章までの考察を統括するとともに、今後の課題、すなわちさらに多くの発掘調査資料の収集等に努め、より信憑性の高い埋没微地形復原図を作成することも論じている。

本論文は、申請者の主張する埋没微地形復原図をベースとして、難波宮・京の考察を行うとともに、難波宮を含む日本の宮都の類型化、さらには難波京に代表される我が国の条里制あるいは条坊制都城の成立と系譜を、中国・朝鮮・日本の東アジア三国との比較を通して、考察しようとする大変意欲的な労作である。とりわけ、付図が100図余りもあり、具体的な実証研究となっており説得力に富む。このように、大変説得力のある好論文となった理由は、本研究は申請者が学部学生時代から30年余年にわたり、一貫して研究してきた内容をまとめたことなどから非常に手堅いものとなっているからである。また分析手法においても、埋没微地形復原図を完成させるなど、他の論文にみられない独創性もみられる。

しかし、埋没微地形復原図で用いられた資料に関して、地域的な濃淡がみられること、また中国・朝鮮の二国に関しては文献調査が主体となっているため、やや概論風になっている。これらの点は、近い将来の課題として残されているといえよう。

とはいえ、本研究は、埋没微地形復原図を完成し、それをベースに論を展開するという

ように、他の歴史地理学研究ではみられない手法が用いられ、歴史地理学研究の新しい手法を開拓した点、また机上の空論ではなくフィールドワークに基づいた実証的研究が主体となっている点において、高く評価される。

申請者本人の問題意識の明確さ、長年における本テーマへの研究の熱意と努力、プレゼンテーション技術の高さは、審査委員一同一致して認めるところである。以上により、審査委員一同は、満場一致をもって、本研究は、博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。